

# 貧困層の生活史

1 失業対策事業就労者生活歴調査覚え書き

高橋 伸 一

は し が き

この小論は昨年の夏の暑い最中に実施した「失業対策事業就労者生活歴調査」の覚え書き的なものである。

というのは、先の調査集計が現在まだ完全に終了してないため、一応今回は不本意ながら、私の面接した事例を中心に報告させていただくことにした。

この調査は全日本自由労働組合京都府支部との合同調査であり、組合役員さんを筆頭に一般組合員の皆さんの多大な協力を得て実現した。

また実際の面接作業には、本学社会科学部浜岡先生の御指導にもとづき、浜岡ゼミ三回生有志諸君があたってくれた。暑中にも負けずに奮闘してくれた諸君に敬意を表したい。

## 序 論 失業対策事業就労者の生活歴

人にはそれぞれの歴史がある。幸福な時もある、不幸のどん底の毎日もある。この生活の歴史を分析することにより、それぞれの人生に起った大小いろんな事件の必然性みたいなもの、あるいは因果関係の法則のようなものが発見できるのではなからうか。

昭和四十八年の秋に突然起った「石油危機」を引金にして、世界の経済は一瞬にして不況に落ち込み、五十年の後半に至っても、景気の回復の兆しは見えない。この不況は当然日本の経済を巻き込んだのだが、その結果多くの問題を政治的にも経済的にも提出した。その問題の一つに雇用・失業問題がある。

この問題は中高年者の求職困難だけでなく、近ごろでは新大学卒者に対しても、企業の採用中止等により

雇用問題は大きな社会問題になろうとしている。このような社会状況において、雇用保障政策としての失業対策事業の果してきたその役割を、そこに就労してきた労働者の生活を通してみてみるのがこの小論の目的の一つである。

それです。まず失業対策事業（以下支対事業と略す）について簡単に触れておこう。失対事業は、戦前、大正十四年（一九二五年）にできた失業応急事業にその端を発するわけだが、これは第一次大戦後の失業者対策の唯一の政策だといわれている。この戦前の失業応急事業が、昭和二十四年に緊急失業対策法の施行により復活した。

それでは、この緊急失業対策法ができた時の社会状況、雇用問題はどのようであったかについて、当時の京都の様子を『全日自労京都府支部二十五年のあゆみ』から引用させていたどころ。

「日本を植民地にし、軍基地に提供し再軍備するため、腐敗した吉田内閣の政策によって、労働者を始め、特に自由労働者の生活は鼻血も出ないほど破壊されつくし、二十四年に京都で六〇〇名の自由労働者が食う

ことになやまされ職を求めて職安に行列がたちはじめた。工場は倒産し、首切りが軒並におそい、西陣織、友禅、清水焼は火を消したようにさびれて行つた。十二月には四、〇〇〇名になり、二十五年には一二、〇〇〇名を越える自由労働者が職安に行くようになった。」

失対事業はこのような社会不安の中で、雇用保障政策と治安維持的政策から出てきたといえよう。また、単に雇用政策だけでなく基本的には労働者の低賃金政策の一環としての役割をもになって出現してきたのである。

以上のような性格を基本的にもって出てきた失対事業はそこに働らく労働者の滞留と高令化が問題になってきた。このことは、昭和三十八年の職安法、失対法の一部改悪による新規の失対事業への流入がストップされたことによるところが大きいが、昭和四十九年四月で平均年令は男六三・五才、女五八・八才、男女平均六〇・五才である。（この数字は京都府の失対事業紹介対象者の平均<sup>(3)</sup>）この年令の人々の生活を、日本史の主な事件と関連させて概観してみると。

六〇才の人を例にとれば、大正四年（一九一五年）

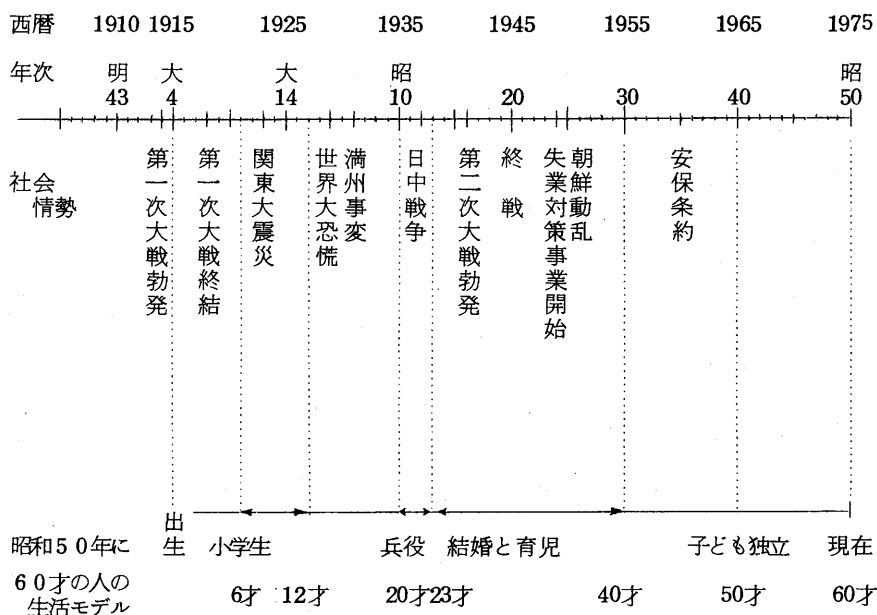
に出生、この時は第一次世界大戦の最中である。八才の時に大正十二年（一九二三年）関東大震災、十二才には金融恐慌、十六才で満州事変、この後日本の軍部は侵略主義を強化し、暗黒の道を歩み出すのにつれ、青年期をむかえ、成長したのである。二六才昭和十六年（一九四一）には大平洋戦争、三〇才で敗戦をむかえた。すなわち、現在（昭和五十一年）六一才の人の生活史は、学齢期を軍国主義一色のもとで過し、結婚年令期には戦争にかり出され、窮乏生活をおくり、仕事を求めても適職は皆無。勉強しようにも思想統制や学徒動員で勉強もできなかった時代である。これらのことは具体的に事例を紹介することにより尚一層明らかにできるだろう。

参考までに社会の情勢と現在六〇才の人の生活史を表にしてみた。（下図）

## 第一章 調査の概要

### 一、調査の目的

被保護層の一連の研究により、社会階層間移動における没落の終着点が単純労働者であることはす



に検出され、単純労働者の消費構造、生活水準と家族構成等の研究も数多くなされている。しかし家族歴特に世帯と職業移動（階層移動）の関連においては未だ充分に解明されていない。この点をテーマにしたのが本調査である。

## 二、調査の方法

### イ、調査対象

京都市における失対就労者、年令六〇才代を中心に無差別抽出。

西陣職安 男 二八 女 二三 計 五一

七条職安 男 三〇 女 二〇 計 五〇

合計一〇一

### ロ、調査の組織

失対の各現場を訪問し、ききとり調査で行なり。

訪問者は仏教大学社会科学科浜岡講師、浜岡ゼミ生および院生である（浜岡、馬田、続木、牧野、本郷、松浦、吉田、戸嶋、藤井、高橋）、なお失対各現場への案内、調査の説明に対しては、全日自労の組合の役員さんをお願いした。

### ハ、調査の時期

調査の時期は、昭和五十年八月下旬である。

## ニ、調査事項と調査票

調査の方法は、調査票を用いて、調査員が面接しながら記入するという方法であり、また対象者が高令者ということ、調査事項が細かく、かなり過去の事項を質問しているので記録はそれぞれのケースで精疎さまでであることは仕方ないことであり、はじめから予想されたことである。

調査票は紙面の都合により、別の機会にゆづり今回は割愛する。

## 三、調査実施までの経過

昭和五十年四月二十五日（金）勸進橋（京都市南区）にある全日自労京都府支部訪問。

四月二十八日（月）全日自労西陣分会訪問

五月 十七日（土）府の職業安定課訪問

五月 十九日（月）市の職業安定課訪問

七月 十九日（土）組合との調査概要の打合せ

八月 一日（金）最終打合せ

八月 九日（土）調査票校正

八月 二十日（水）大学研究室に調査参加者集合、

調査方法の学習会。

八月二十一日 木

失対事業現場の下見、調査に際  
しての注意を確認

八月二十二日 金

午前八時三〇分

二十三日 土

各組合分会に集合

二十五日 月

午後三時三〇分

二十六日 火

各失対事業現場から引あげ、  
その後、簡単に反省を行なう。

二十七日 水

二十八日 木

二十九日 金

## 第二章 事例紹介

失対就労者の大部分は、二十年以上も失対で働いてきた人である。このことはいろいろな意味が含まれているといえようが、とにかく、生涯で最長の仕事か“失業対策事業”であるということは、正しい意味での就労の形態とはいえない。しかし問題はそのようなことにあるのではなく、他に、失対以外に就労できなかったという社会条件にこそあるのである。

表1 失業対策事業紹介対象者数

P E S O 別 地域		① 計	② 男	③ 女	④ 昨年同期	④-① 減少数
京都市	京都西陣	1,956人	467人	1,489人	2,039人	83人
	京都七条	1,919	704	1,215	2,003	84
	伏見	1,189	298	819	1,235	46
市内3 P E S O 計		5,044	1,469	3,595	5,277	213

表2 65才以上の紹介対象者

項 目 地域 安定所別		65才以上紹介対象者		全体比
京都市	京都西陣	817人	524人	41.8%
	京都七条	686	309	35.7
	伏見	367	196	30.9
市内3 P E S O 計		1,870	1,029	36.9

(表1、2の出所) 京都府職業安定課『昭和49年度 失業対策事業概要』

この失対事業における「滞留」について、戸木田氏は次のように述べている。<sup>(5)</sup>

「失対労働者の平均年令は確かにいちじるしく高くなつてきており、昭和四十二年には平均勤続年数も十年五カ月に達しています。しかし問題なのは、なぜそういう滞留が起こるのかということであつて、結局のところ、失対事業で働いている人々が労働力不足だといわれながらも、就職先がみつかるという年令階層の人ではないということにあります。もともと、失対労働者は中高年層が多く、そのなかには、御主人をなくした女の人も少なくない。しかも政府は昭和三十八年いらい失対就労の条件を極度にせばめているわけだから、失対労働者の老令化・滞留という状況がでてくるのも当然だといわねばなりません。」

このことは、これから紹介する事例においても例外ではなく、失対流入時にすでに四〇才から五〇才であり、しかも男性の場合は戦争における肉体的なダメージが重なり、失対からの脱出は、はなはだ困難であつたことが想定されよう。

今までに述べてきた失対労働者をとりまく諸条件を

紹介事例の概要一覽

番号	ケース名	性別	満年令	世帯構成	別居の子の有・無
1	A	男	64才	本人・妻	有
2	B	男	72才	ひとり暮らし	無
3	C	男	56才	ひとり暮らし	無
4	D	男女	67才	本人・夫	有
5	E	女	71才	ひとり暮らし	無
6	F	女	60才	本人・同居人	有
7	G	女	70才	本人・子ども夫婦	有

土台にして、男三ケース、女四ケースを紹介しよう。

ケースA

時点①

初就職、本人

十八才、(昭和

三年、一九

二八年) 京都

市

生家は自作

農家であり、

六反の田畑を

所有していた。

六人兄弟で次男に生まれたが家の暮らしむきは比較的快乐だったらしく中学校まで進学させてくれた。学校を出た直後に結核になり七年間の闘病生活をすごしたのち、知人の紹介で京都中央郵便局に就職した。

時点② 結婚本人二七才、妻二四才(昭和十一年、一

〔ケースA〕

生年月日

明治42年9月21日

男

失対登録

昭和26年5月

本人40才

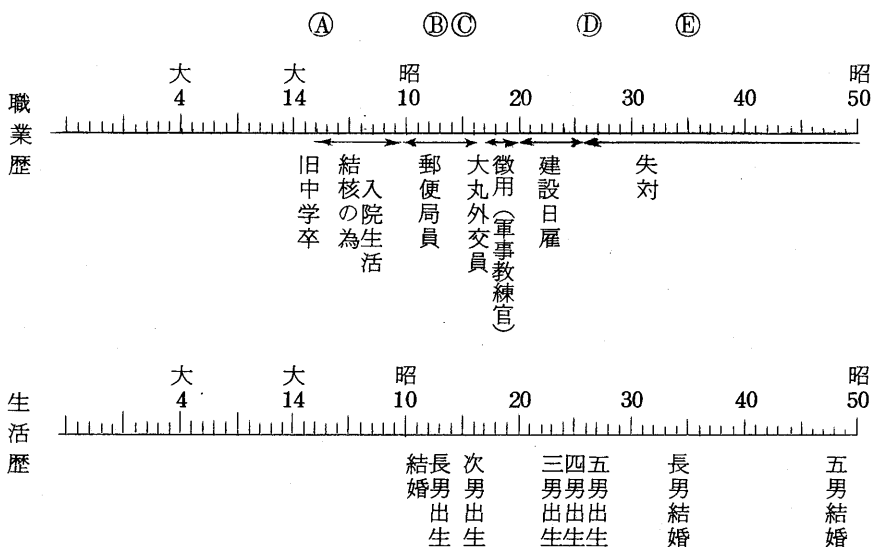
## 1. 家族構成

番号	続柄	性別	満年齢	学歴	職業	7月の収入	備考
1	本人	男	64才	旧中学校	失対日雇	4.5万円	
2	妻	女	62才	旧女学卒	なし	なし	

## 2. 別居の子ども

番号	本人との続柄	性別	満年齢	学歴	職業	住所	家族数
1	長男	男	37才	中学卒	農業	京都市	4人
2	次男	男	34才	中学卒	会社事務	〃	3人
3	三男	男	27才	高卒	三人で水道屋を開業	〃	5人
4	四男	男	25才	中学卒		〃	1人
5	五男	男	23才	中学卒		〃	2人

(子どもたちとの交流はよくあるようだが、経済的な援助はないようだ。)



九三六年）京都市

仕事は郵便局であり、農業をやっている両親、兄夫婦と同居していたので生活はまあまあであった。

時点③ 長子出生 本人二九才、妻二六才（昭和十三年、一九三八年）京都市

また両親、兄夫婦と同居であるが、この後身体がしんどいのと、給料が安いので、仕事を京都大丸百貨店の外交員にかわった。しかし世の中はだんだん戦争が激しくなり、このままでは兵隊に引っぱられると考え、島津製作所に徴用で軍事教練の指導員になった。

敗戦後は、日雇などを転々としてたり、実家の農業を手伝ったりで何とか喰うことはできた。

時点④ 末子出生 本人四二才、妻三九才（昭和二十六年、一九五一年）京都市

五人の子どもをかかえ親の援助で喰ってはいけるが、何か仕事をせねばと考えていたところ、失対を知り気軽に入った。

時点⑤ 長子結婚 本人五一才、妻四八才（昭和三十五年、一九六〇年）京都市

子どもたちも成長したので、その分生活は楽になっ

〔ケースB〕

生年月日

明治36年3月2日

男

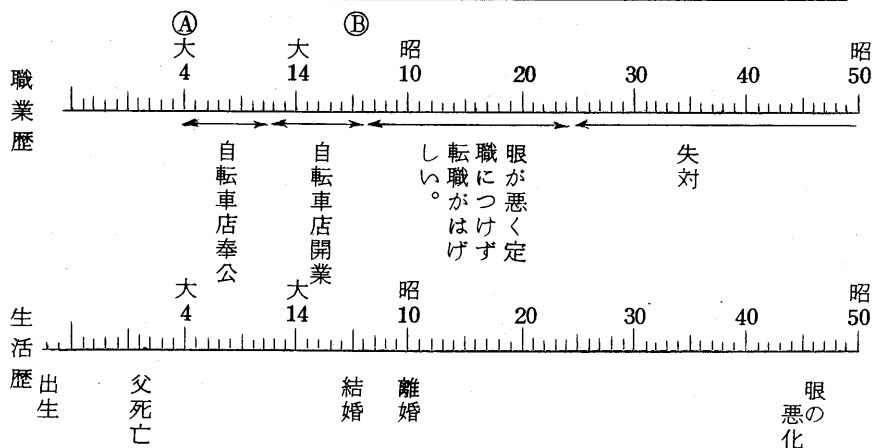
失対登録

昭和25年5月

本人 47才

### 1. 家族構成

番号	続柄	性別	満年齢	学歴	職業	7月の収入	備考
1	本人	男	72才	旧小学卒	失対日雇	4万円	子どもなし





てきた。この後順時結婚してそれぞれ独立してやっている。まだ四男が独身だが下の三人の男の子が協力して水道工事店を昭和45年に開業、がんばっている。

#### ケースB

時点④ 初就職、本人 十二才（大正四年、一九一五年）京都市

本人がまだ小さい時に父親は死亡、母と姉の三人ぐらし。母親は何かの行商で生計を立てていたが生活は苦しく、学校を出るとすぐに口入れ屋の紹介で自転車店に住込み奉公に出た。

時点⑤ 結婚、本人 二七才、妻 二四才（昭和五年、一九三〇年）京都市

二〇才には独立して自転車店を開業し、まじめに働いていた。二七才で結婚した。しかし結婚後急に遊びだし、家を留守にする日が続いた、そうしているうちに自転車店は失敗、間もなく妻に家出され、そのまま離婚となる。子どもはできなかった。

自転車店がつぶれてからは仕事もする気がなかったし、このころから少し悪かった眼もますます悪化したため、ろくな仕事につけなかった。やっと就職したら

会社が倒産したりしてどうにもしうがなかった。戦争は激しくなり生活は大変だったが、ひとり身だったので食べるぐらいいは何とかやれた。その後、敗戦をむかえ、土方や何やらしたが、身体がしんどくなり、他によい職もなかったので、昭和二十五年五月に失対に入った。

昭和四十五年から、眼がいよいよ見えなくなったのでその年から身障者手当を受給している。

#### ケースC

時点⑥ 初就職、本人 十八才（昭和十二年、一九三七年）京都市

父親も母親も早くなくなったため、妹と二人して親類の家に世話になった。その親類は豊かな生活をしていたので、本人は旧制中学まで出してもらっている。しかし何かと肩身の狭い思いをしたらしく人を信じれないような性格だと本人が述べている。

初就職は学校の紹介で満州の軍指令部に設計者として雇われた。その後は、兵役、徴用、予備役と軍関係の仕事転じている。終戦は名古屋でむかえ、京都にもどってからは買出し、手伝いで暮らしていた。

〔ケースC〕

生年月日

大正8年4月

男

失対登録

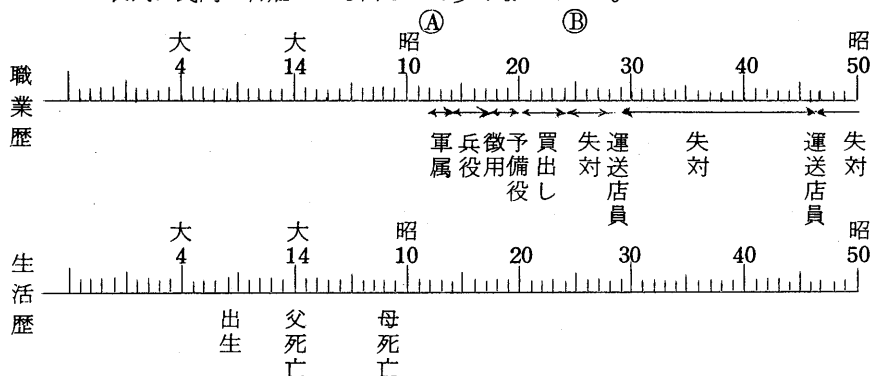
昭和25年

本人 31才

## 1. 家族構成

番号	続柄	性別	満年齢	学歴	職業	7月の収入	備考
1	本人	男	56才	旧中学卒	失対日雇	10万	

収入は民間の日雇いにも出るので多くなっている。



時点② 失対登録 本人 三十一才(昭和二十五年、一九五〇年) 京都市

結婚は戦中戦後の混乱で機会を逸した。失対に登録したのは失対手帳がないと民間で使ってくれなかったからだそうで、他の失対労働者とは多少失対登録の理由が異なる。

肉体的に強健であり、何度も失対から出ようと考え、現に昭和二十八年に運送屋の荷づみの仕事についた。しかし身体がもたなかったために一年位で失対にもどっている。

現在は失対で就労しながら、月一〇日ぐらい民間日雇に就労して生活している。

## ケースD

時点① 初就職 本人 十二才(大正十年、一九二一年) 京都市

父親は本人が八才の時に家出。祖父母がぞうり作り、母親は花の行商で何とか生計を立てていたがとても苦しい家計であった。

本人が十二才には一家の中心だった母親が病死、家には小さな妹もあり、口減らして西陣に織子として奉

〔ケースD〕

生年月日 明治41年3月23日

女

失対登録 昭和26年4月

本人 42才

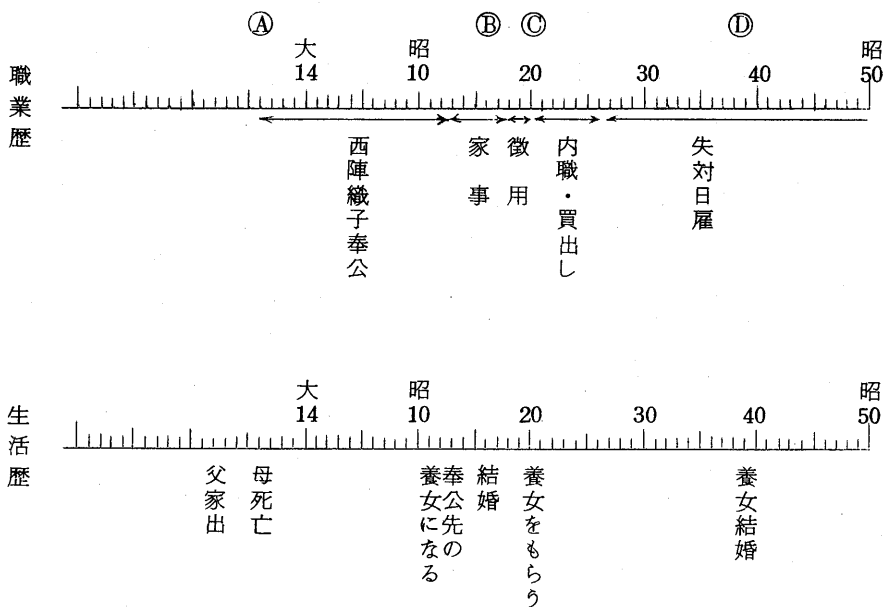
## 1. 家族構成

番号	続柄	性別	満年齢	学歴	職業	7月の収入	備考
1	本人	女	67才	旧小卒	失対日雇	4万円	
2	夫	男	73才	旧小学中退	大工手元	4万円	

## 2. 別居の子ども

番号	本人との続柄	性別	満年齢	学歴	職業	住所	家族数
1	養女	女	34才	中卒	夫は洋品店の支店長	大分	10人

(養女は夫の転勤で別居しているが、転勤の前は本人夫婦と同居していた。)



〔ケースE〕

生年月日

明治37年11月2日

女

失対登録

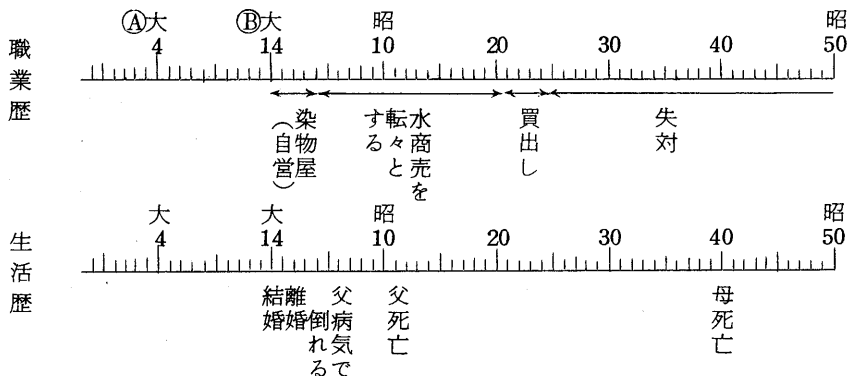
昭和24年

本人 45才

## 1. 家族構成

番号	続柄	性別	満年令	学歴	職業	7月の収入	備考
1	本人	女	71才	小学中退	失対日雇	4万円	

結婚歴はあるが子どもはない。



公に出た。

時点① 結婚 本人 三三才 夫 三九才(昭和十七

年、一九四二年) 京都市

本人二八才の時、奉公先の織屋の養女となったが、

義父母がその後続いて病気になり看病で追われ、結婚  
が遅くなった。夫は同じ西陣で紋紙を作る職人であり

養子縁組だった。

時点② 養子縁組 本人 三六才 夫 四二才(昭和

二十年、一九四五年) 京都市

結婚後まもなく夫は舞鶴の軍事工場に徴用で引張ら  
れ、本人も軍の命令でレース会社に徴用で行かねばな  
らなかつたりで子どもができなかった。そこで養女を  
もらった。夫は徴用で身体を悪くし、大工の手伝いぐらいしか  
働けなくなつたので、本人がヤミ屋をしたりして何と  
か喰つていた時である。失対に入つたのは、買出しもできなくなり、自分の  
内職(組みひも)ではどうしようもなく、他に働く仕  
事もなかつたので入った。

時点① 養女結婚 本人 五五才 夫 六一才（昭和三十一年、一九六四年）京都市

失対で働くのでは生活は大変に苦しいが何とか子どもを大きくしてきた。養女にも養子さんをもらった。昭和四十二年に二カ月程夫が手術をして入院した時、入院費に困り福祉事務所から援助してもらったが、それ以外は元気にやっている。娘のところが子たくさん（八人）なので、それが少し恥かしいのが悩み。

ケースE

時点④ 初就職 本人十二才（大正六年、一九一七年）京都市

生家は染物屋（自営）であった。本人は子どものころから目が悪かったため小学校も中退して家で遊んでいた。この頃は父親も母親も元気であり、ひとりっ子の本人を可愛いがっていた。

時点⑤ 本人 二一才、夫二六才（大正十四年、一九二五年）京都市

養子縁組で結婚したのだが、夫は家業の染物に熱心でなく、もっぱら遊んでばかりの人だったので、結婚後二年で離婚した。

このため子どもはできなかった。離婚後、家業の中心だった父親が中風で倒れ、染物屋ができなくなり、病気の父を養うため水商売に出るようになった。

父親は倒れて七年程で亡くなったが、その後母親との二人暮らしで戦中戦後を生きてきた。失対に入ったのは生きるためであった。

母親も十年前に亡くなり、それ以後一人で生活している。

ケースF

時点④ 本人 一〇才（大正四年、一九一五年）滋賀県

生家は、父親は漁に出て母親は小作で少し農業をやっていたが、父親は仕事をほとんどしなかったので本人は通いで料理屋の女中、下働きに出て一家を支えていた。

十九才から二一才にかけて眼をわずらい、ほとんど見えなくなったが伯母さんが世話してくれたので何とか回復できた。

時点⑤ 本人 二二才 夫 二九才（昭和十二年、一九三七年）京都市

〔ケースF〕

生年月日 大正4年5月24日

女

失対登録 昭和42年12月

本人 52才

## 1. 家族構成

番号	続柄	性別	満年齢	学歴	職業	7月の収入	備考
1	本人	女	60才	旧小卒	失対日雇	4万	
2	家主	女	89才	不明	なし	生活保護	寝たきり老人

## 2. 別居の子ども

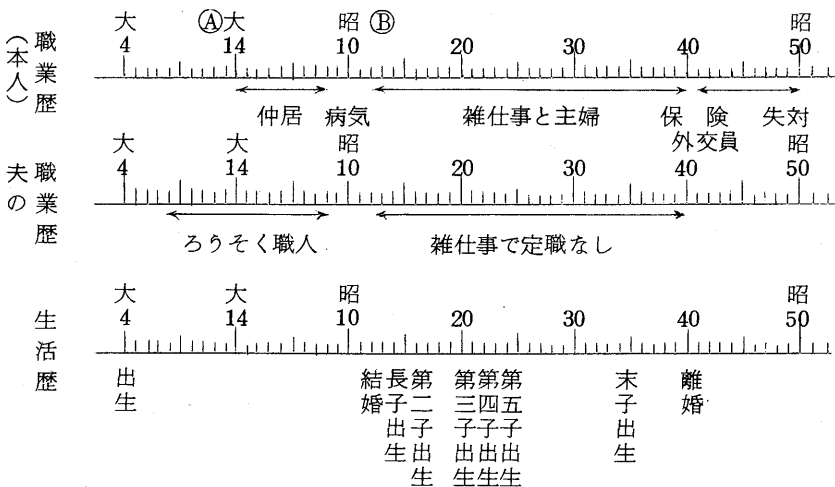
番号	本人との続柄	性別	満年齢	学歴	職業	住所	家族数
1	長女	女	38才	中学卒	ろうけつ染職人	京都市	3人
2	長男	男	34才	高卒	ふとん屋店員	京都市	3人
3	次女	女	30才	中学卒	主婦	亀岡市	5人
4	三女	女	28才	〃	〃	京都市	4人
5	四女	女	26才	〃	〃	〃	2人
6	五女	女	16才	〃	店員	〃	1人

長女の夫は事故で死亡。

長男夫婦の家に別れた夫は同居している。

五女は会社の寮に入っている。

子どもたちの交際は皆無であるようだ。特に長男が他の妹たちに母親との行き来を禁じているらしい。



ろうそく作り職人をやっていた夫と結婚したけれど、結婚した頃から夫は遊んでいた。そして給料を少しも入れてくれないので、本人はおでん屋に勤めて生計を立てた。子どもが結婚と同時に生まれているし、その後も子どもが生まれているので如何に生活が苦しかったか想像される。夫はろうそくの仕事を十一才の時からやってきたが時代の流れて会社がつぶれ、仕事をしなくなり遊びだしたようだ。

時点◎ 本人 四五才、夫 五二才（昭和三十四年、一九五九年）京都市

夫は相も変らず雑仕事で給料をくれなかった。そのため本人は借金を方ぼうにしたり、つきそい看護人などをしてやりくりをしていた。しかし昭和四十年に、借金が夫にばれてしまい、離婚させられた。

住む家もなかったが親切にしてくれた人がいて（現在同居している家主がその人）住まわせてくれた。仕事は生命保険の外交などやったが失対に入れたので、生命保険外交員はやめた。

現在、同居人が寝たきりの病人なので本人が全部世話をしている。そのため失対事業には月のうち十日も

出られない、また食事の世話、下の世話と大変苦しい生活の連続なので何とか生活保護を受給したいと申請しているが認めてくれないらしい。

#### ケースG

時点① 本人 九才（大正三年、一九一四年）京都市  
父親は伏見の酒仲仕。当時は伏見には日本酒に適した井戸水が多くあり、その水を請負いで運ぶ仕事があった。本人が小さい時に母は死亡、義母との生活が耐え切れず九才で小守奉公で住込んでしまった。

時点② 本人 二三才、夫 三七才（昭和三年、一九二八年）京都市

結婚は先の奉公先からしてもらい、夫がそれまでやっていた屋台のうどん屋から、二人で小さなうどん屋の店を開いた。

しかし夫は結婚後間もなく遊びに熱をあげてしまい、店の仕事をしなくなった。

時点◎ 本人 三三才、夫 死亡（昭和十三年、一九三八年）京都市

次男、三男と出産育児の毎日に追われながら、うどん屋を何とかやってきたが、ついに夫は急性肺炎で死

〔ケースG〕

生年月日 明治38年12月27日

女

失対登録 昭和25年

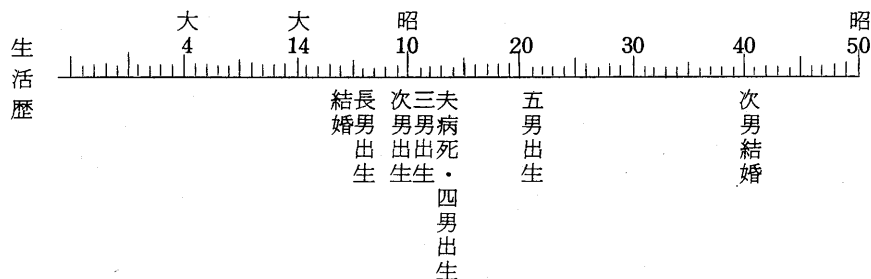
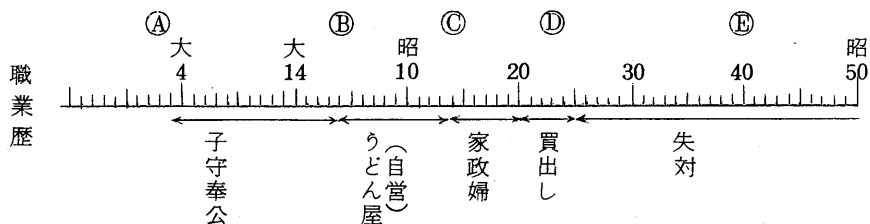
本人 45才

## 1. 家族構成

番号	続柄	性別	満年齢	学歴	職業	7月の収入	備考
1	本人	女	70才	小学中退	失対日雇	4万円	従業員 約50名
2	三男	男	40才	中学卒	日通運転手	不明	
3	三男妻	女	38才	中学卒	内職	1万円	
4	孫	女	5才				
5	五男	男	30才	高校卒	製本紙工員	不明	

## 2. 別居の子ども

番号	本人との続柄	性別	満年齢	学歴	職業	住所	家族数
1	長男	男	47才	中卒	病氣入院	京都市	1人
2	次男	男	41才	中卒	左管職人	〃	3人
3	四男	男	38才	中卒	日通運転手	〃	2人





亡、その時は四男がお腹にいるなど、まったく苦しか

ったようだ。特に死んだ夫が借金をしていたので、店も人手に渡るし、本人は昼も夜も働らいたそうである。

時点⑩ 本人 四〇才（昭和二十年、一九四五年）

京都市

敗戦後の混乱時女手一人で四人の子を育てるのは並のことではなかった、特に長男がグレてしまい、どれだけ泣かされたかしないと語っていた。そんな苦しい毎日の中で五男を生んでいる。

時点⑪ 本人六〇才（昭和四十年、一九六五年）

京都市

長男は極道で遊んでいて結婚はしていないので、次男が結婚をした。これで子ども達もどうやら一人前になりやっと一服できるようになったようである。しかし家で嫁と顔を合わせっぱなしでは何かといやな事ができるので、死ぬまで失対で働らくそうである。

## 貧困層生活史の課題

（事例のまとめにかえて）

貧困層（失対労働者）の職業移動と家族、世帯の対応を分析するのが今回の研究の目的であった。そこで以上に紹介した七ケースをもとに、職業移動と家族形態との関連を考察しよう。

一般的には、家族はそれぞれの段階ごとに一定の周期をもつてくりかえされるものであることは家族周期論等によつて説明されているが、失対労働者においては、それら家族周期を経るケースは多くはない。それは先の七ケースにおいても同様であり、七ケース中三ケースのみが家族周期を展開するが他の四ケースはそれからはずれてしまっている。この周期化し得ないということは、換言すれば家族が再生産されないということであり、また労働力の再生産がなされないという、いわゆる貧困化そのものだということである。

さて、問題はなぜ一般的な家族形態を形成して、周期化の過程に入れなかったのかという点である。そこには如何なる障害が存在し、障害にぶつかったあぐくどのような対応がなされたのかということである。こ

のような問題を、(一)失対流入前の仕事 (二)職業歴の特徴 (三)死離別の影響、の三点にしばって先の七ケースをながめてみよう。

### 一、失対流入前の仕事

失対事業に就労するということはそれ以外に働ける場がなかったということであるが、そのことがどのケースにもいえよう。男の場合は建設日雇、土方、などですでに失対と同じ不安定就業層からの転落だといえる。女の場合は戦後の混乱期を直接に反映するように、買出しが主であるのでこれまた男と同様のことがいえよう。

### 二、職業歴の特徴

職業歴の特徴といってもいろいろ考えられるが、ここでは就業期間の長短を考える。

一般的に男は転職が激しい、特に単身者においてそのことがいえる。ケースBは眼が悪いという身体的条件も加わって、離婚後失対に入るまでの十六年間に何度転職したか本人も覚えていない程である。ケースCも戦争中であつたが、八年間に四回変わっている。

女の場合はずっと職業そのものが内職的なものであり離婚や夫の死亡により本格的に労働者として登場してくるので、男のように考えられない。

### 三、死離別の影響

現代社会においては各種社会保険や社会保障が整備され、貧困化防止策は万全だと云われるが果してどうだろうか。一家の柱を失えば一瞬にして生活保護受給世帯になるのが実情ではなからうか。現代のように政府が「福祉国家」を自認していても危ういのだから、戦前のような保護救済制度がほとんど皆無であつた時代に死離別することとは、如何なる生活の破たんを生じたであらう。ことさら、女の場合は死離別は即貧困層への入場券になりがちであつた。ケースE、Fの場合は離婚によるもので、ケースGは夫の死亡による場合である。

以上三点にわたつて七ケースから推測できる点を述べてきたが。ケースが少ないのでまだまだ確かなことはいえないのが現段階でありその意味で覚え書にとどまつたことをお許し願いたい。今後は他のケースを合わせてより一層詳細に、各ライフ・ステージごとの分

析を進めたい。

なお、この調査に対して終始ご協力をしていただいた全日自労京都府支部委員長関根芳夫氏、書記長青木氏、西陣分会の太田、吉田、添田各氏に深い感謝の意をこの紙上で表させていただきます。

一九七六年五月

(大学院修士課程)

## △ 会 員 募 集 V

当社会学研究会では、社会学に関心をもつ方を学内・学外を問わず広く会員として募集致しておりますのでご入会下さるようお勧め致します。

なお、会費は年間二、〇〇〇円です。但し、通学課程・通信教育課程の学部学生は、年間一、〇〇〇円です。

注(1) 全日自労京都府支部

『全日自労京都府支部二十五年のあゆみ』

一九七四年 六ページ

注(2) 戸木田嘉久『働くものと部落問題』部落問題研究

所 一九七六年 八五ページ

注(3) 京都府民生労働部職業安定課

『昭和四十九年度 失業対策事業概要』

注(4) 労働調査研究所『戦後日本の労働調査』

東大出版会

注(5) 戸木田嘉久 前掲書 九八ページ